

『藥草取』

泉鏡花作

第一章

日光掩蔽にっくわつあんへい

地上清涼ちじやうせいりやう

靉靄垂布あいたいずいふ

如可承攬にょかしやうらん

其雨普等こいうぷとう

四方俱下しほうくげ

流樹無量りうじゆむりやう

率土充洽そつどじうがふ

山川險谷さんせんけんこく

幽隧所生いうすゐしよじやう

卉木藥艸きぼくやくせう

大小諸樹だいせうしよじゆ

「もし憚ながらお布施申しませう。」

背後から呼ぶ優しい聲に、醫王山の半腹、樹木の鬱葱たる中を出で、不圖夜の明けたやうに、空澄み、氣清く、時しも夏の初を、秋見る晝の月の如く、前途遙なる高峰の上に日輪を仰いだ高坂は、愕然として振返つた。

人の聲を聞き、姿を見ようとは、夢にも思はぬまで、遠く里を離れて、はや山深く入つて居たのに、呼懸けたのは女であつた。けれども、高坂は一見して、直に何等害心の無い者であることを認め得た。

女は片手拝みに、白い指尖を唇にあて、俯向いて經を聞きつゝ、布施をしようと云ふのであるから、「否、私は出家ぢやありません。」

と事もなげに辭退しながら、立停つて、女の其の雪のやうな耳許から、下膨れの頬に掛けて、柔に、濃い淺葱の紐を結んだのが、露の朝顔の色を宿して、加賀笠といふ、縁の深いので手を隠した、背には花籠、脚に脚絆、身輕に扮装つたが、艶麗な姿を眺めた。

彼方は笠の下から見透すが如くにして、

「これは失禮なことを申しました。お姿は些とも然うらしくはございませんが、結構な御經をお読みなさいますから、私 は、あの、御出家ではございませんでも、御修行者でいらつしやいませうと存じまして。」

背廣の服で、足拵へして、帽を眞深に、風呂敷包を小さく西行背負といふのにして居る。彼は名を光行とて、医科大学の、学生である。

時に、妙法蓮華經薬草諭品、第五偈の半を開いたのを左の掌に捧げて居たが、右手に支いた力杖を小脇に搔上げ、

「そりやまあ、修行者は修行者だが、未だ全然素人で、奈何して御布施を戴くやうなものぢやない。

讀方だつて、何だ、大概、大學朱熹章句で行くんだから、尊い御經を勿體ないが、此の山には薬の草が多いから、氣の所為か知らん。麓から恚うやつて一里ばかりも来たかと思ふと、風も清々しい薬の香がして、何となく身に染むから、心願があつて近頃

から読み覺えたのを、誦へながら歩行いて居るんだ。」

「恁く打明けるのが、此際自他の為と思つたから、高坂は親しく先づ語つて、扱。」

「姉さん、お前さんは麓の村にでも住んでゐる人なんか。」

「はい、二股村でございます。」 「あゝあの、越中の礪波へ通ふ街道で、此處に来る道の岐れる、目まぐるしいほど馬の通る、彼處だね。」

「然やうでございます。最う路が悪うございまして、車を通りませんものですから、炭でも薪でも、残らず馬に附けて出しますのでございます。」

それに丁ど此の御山の石の門のやうに成つて居ります、戸室口から石を切出しますのを、皆馬で運びますから、一人で五疋も曳きますのでございますよ。」

「それでは其の麓から来たんだね、唯一人。」  
「静に歩を移して居た高坂は、更に又女の顔を見た。」

「はい、一人でございます、而して此方へ参りますまで、お姿を見ましたのは、貴方ばかりでございますよ。」

いかにもといふ面色して、

「私も矢張、然うさ、半里ばかりも後だつた、途中で年寄つた樵夫に逢つて、路を聞いた外にはお前さん限。」

奈何して往つて還るまで、人ツ子一人居ようとは思はなかつた。」

此の邊唯なだらかな蒼海原、沖へ出たやうな一面の草をニしながら、

「や、ものを言つても一つ一つ笥に響くぞ、寂しい處へ、能くお前さん一人で來たね。」

女は乳の上へ右左、幅廣く引掛けた桃色の紐に兩手を挟んで、花籃を揺直し、

「貴方、其の樵夫の衆にお尋ねなすつて可うございました。そんなに峻しい坂ではございませんが、些とも人が通ひませんから、誠に知れ難いのでございます。」

「此の奥の知れない山の中へ入るのに、目標が那の石ばかりぢや分らないかね。」

それも、南北、何方か醫王山道とでも鑿りつけてあれば未しもだけれど、唯河原に轉つてゐる、ごろた石の大きいやうな、其の背後から草の下に細い道があるんだもの、一寸間違へようものなら、半年経歴つても頂には行かれないと、樵夫も言つたんだが、全體何だつて、そんなに秘して置く山だらう。全く那の石の裏より外に、何處も路はないのたらうか。」

「ございませんとも、此の路筋さへ御存じで在らつしやれば、世を離れました寂しさはかりで、獣も可恐のは居りませんが、一足でも間違へて御覧なさいまし、何千丈とも知れぬ谷で、行留りになりますやら、斷崖に突當りますやら、流に岩が飛びまたり、大木の倒れたので行く前が塞つたり、其間には草樹の多いほど、毒蟲もむら／＼して、甚麼に難儀でございませう。」

舊へ歸るか、俱利伽羅峠へ出抜けますれば、無事に何方か國へ歸られます。其でなくつて、無理に先へ參りますと、終局には草一條も生えません焼山に

成つて、餓死をするさうでございます。

本當に貴方がおつしやいます通り、樵夫がお教へ申しました石は、飛驒までも末廣がりの、醫王の要石と申しまして、一度踏外しますと、それこそ路がばら／＼になつて了ひますよ。」

名だたる北國秘密の山、然もこそと思つたけれども、

「然し一體、醫王といふほど、此處で藥草が採れるのに、何故世間とは隔つて、行通がないのだらう。」

「それは、あの承りますと、昔から御領主の御禁山で、滅多に人をお入れなさらなかつた所為なんでございますつて。御領主ばかりでもござんせん。結構な御藥の採れます場所は、又御守護の神々佛様も、出入をお止め遊ばすのでございませうと存じます。」

譬へば仙境に異靈あつて、恣に人の藥草を採る事を許さずといふが如く聞えたので、是が少からず心に懸つた。

「それでは何か、私なんぞが入って行って、欲しい  
草を取って帰っては悪いのか。」  
と高坂は稍氣色ばんだが、悚然と肌寒くなつて、  
思はず口の裡で、

慧雲合潤

電光晃耀

雷聲遠震

令衆悦豫

日光掩蔽

地上清涼

雲霧垂布

如可承攬

## 第二章

「否、山さへお暴しなさいませねば、誰方がおいでなさいましても、大事なさうでございます。薬の草もあります。上は、毒な草も無いことはございませぬ。無暗な者が採りますと、どんな間違にならうも知れませんか、昔から禁札が打つてあるのでございませう。」

貴方は、然うして御經をお読み遊ばすくらゐ、縦令お山で日が暮れても些ともお氣遣な事はございませぬと存じます。」

言ひかけて又近き、

「あの然やうなら、貴方はお薬になる草を採りにおいでなさるのでござんすかい。」

「少々無理な願ですがね、身内に病人があつて、逆も醫者の薬では治らんに極つたですから、此の醫王山でなくつて外に無い、私が心當の薬草を採りに来たんだが、何、姉さんは見懸けた處、花でも摘みに上るんですか。」

「御覽の通、花を賣りますものでござんす。二日置き、三日置に參つて、お山の花を頂いては、里へ持つて出て商ひます、丁ど唯今が種々な花盛。

千蛇が池と申しまして、頂に海のやうな大な池がございます。而して此の山路は何處にも清水なぞ流れては居りません。其代暑い時、咽喉が渴きますと、蒼い小な花の咲きます、日蔭の草を取つて、葉の汁を噛みますと、それは最う、冷い水を一斗ばかりも飲みましたやうに寒うなります。其が無いと凌げませんほど、水の少い處ですから、菖蒲、杜若、河骨はござんせんが、躑躅も山吹も、あの、牡丹も芍薬も、菊の花も、桔梗も、女郎花でも、皆一所に開いて居ますよ、此の六月から八月の末時分まで。其の牡丹だの、芍薬だの、結構な花が取れますから、たんとお鳥目が頂けます。まあ、どんなに綺麗でございませう。

而して貴方、お望の草をお採り遊はすお心當は何の邊でござんすえ。」

と笠ながら差覗くやうにして親しく聞く、時に清

い目がちらりと見えた。

高坂は何となく、物語の中なる人を、幽境の仙家に導く牧童などに逢ふ思ひがしたので、言も自から慇懃に、

「私も其處へ行くつもりです。四季の花の一時に咲く、何といふ處でせうな。」

「はい、美女ヶ原と申します。」

「びぢよがはら？」

「あの、美しい女と書きますつて。」

女は俯何いて羞ぢたる色あり、物の淑しげに微笑む様子。

可懐さに振返ると、

「あれ。」と袖を斜に、袂を取つて打傾き、

「あれ、まあ、御覧なさいまし。」

其の草染の左の袖に、はら／＼と五片三片紅を  
點じたのは、山鳥の抜羽か、非ず、蝶か、非ず、  
蜘蛛か、非ず、櫻の花の零れたのである。

「奈何でございませう、此の二三ヶ月の間は、何處からともなく、恚うして、ちら／＼ちら／＼絶えず散つて参ります。それでも何處に櫻があるか分りません。美女ヶ原へ行きますと、十里南の能登の岬、七里北に越中 立山、背後に加賀が見晴せまして、もう此節は、霞も霧もかゝりませんのに、見紛ふやうな其らしい花の梢もござんせぬが、大方此の花片は、煩い町方から逃けて来て、遊んで居るのでございませう。それとも那裏這裏山の中を何かの御使に歩いて居るのかも知れませぬ。」

と女が高く仰ぐに連れ、高坂も葎の中に伸上つた。草の緑が深くなつて、倒に雲に映るか、水底のやうな天の色、神靈秘密の氣を籠めて、薄紫と見るばかり。

「其の美女ヶ原まで何のくらゐあるね、日の暮れない中行かれるでせうか。」

「否、恚う櫻が散つて参りますから、直でございませぬ。私も其處まで、お供いたしますが、今日こそ貴方のやうなお連がございますけれど、平時は一人で参りますから、日一杯に里まで歸るのでございま

す。  
」

「日一杯？」と思ひも寄らぬ状。

「甚麼に又遠い處のやうに、樵夫がお教へ申したのでござんすえ。」

「何、樵夫に聞くまでもないです。私に心覺が丁とある。先づ凡て山の中を二日も三日も歩行かなければならないですな。」

尤も上りは大抵何のくらゐと、そりや豫て聞いては居るんですが、日一杯だの最う直だの、什麼に輒く行かれる處とは思はない。

御覽なさい、恚うやつて、五體の満足なは謂ふまでもない、谷へも落ちなけりや、巖にも躓かず、衣物に綻が切れようぢやなし、生爪一つ剥しやしな  
い。

支度は爲て來たつても餓い思ひもせず、其の蒼い花の咲く草を捜さなけりやならんほど渴く思ひを為るでもなし、勿論此の先甚麼難儀に逢はうも知れんが、其だつて、花を取りに里から日歸をすると云ふ、姉さんと一所に行くんだ、急に日が暮れて闇になら

うとも思はれないが、全く是限で、一足づゝ出さへ  
すりや、美女ヶ原になりますか。」

「えゝ、譯はございません、貴方、そんなに可恐  
處と御存じで、其の上、お薬を採りに入らしたの  
でございますか。」

言下に、

「實際命懸で來ました。」と思ひ入つて答へると、  
女はしめやかに、

「それでは、よく／＼の事でおあんなさいませう  
ねえ。」

でも何もそんな難しい御山ではありません。但此  
處は靈山とか申す事、酒を覆したり、竹の皮を打棄  
つたりする處ではないのでございます。まあ、難有  
いお寺の庭、お宮の境内、上つ方の御門の内のやう  
な、歩けば石一つありませんでも、何となく謹みま  
せんと成りませんばかりなのでございます。而して  
貴方は、美女ヶ原にお心覺えの草があつて、其處ま  
でお越し遊ばすに、二日も三日もお懸りなさらねば  
なりませんやうな氣がすると仰有いますが、何時か  
一度お上り遊はした事がございますか。」

「一度あるです。」

「まあ。」

「確かに美女ヶ原と云ふ其でせうな、何でも躑躅や椿、菊も藤も、原一面に咲いて居たと覺えて居ます。けれども土地の名どころぢやない、方角さへ、何處が何だか全然夢中。」

「今だつて猶且、私は同一此の國の者なんです、其時は何為か家を出て一月餘、山へ入つて、彼是、何でも生れてから死ぬまでの半分は彷徨つて、漸々其處を見たやうに思ふですが。」

高坂は語りつゝも、長途に苦み、雨露に曝された當時を思ひ起すに付け、今も、氣弱り、心疲れて、爰に深山に塵一つ、心に懸らぬ折ながら、猶且つ垂々と背に汗。

絲のやうな一條路、背後へ聲を運ぶのに、力を要した所為もあり、薬王品を胸に抱き、杖を持った手に帽を脱ぐと、清き額を拭ふのであつた。

其と見る目も敏く、

「もし、御案内がてら、あの、私がお前へ参りませう。どうぞ、其の方がお話も承りようございませうから。」

一議に及ばず、草鞋を上げて、道を左へ片避けた、足の底へ、草の根が柔に、葉末は脛を隠したが、裾を引く荊も無く、天地閑に、蟲の羽音も聞えぬ。

### 第三章

「御免なさいまし。」

と花賣は、袂に留めた花片を惜やはら／＼、袖を胸に引合せ、身を細くして、高坂の體を横に擦抜けた其片足も葎の中、路は然ばかり狭いのである。

五尺ばかり前にすらりと、立直る後姿、裳を籠めた草の茂り、近く緑に、遠く淺黄に、日の色を隈取る他に、一木のありて長く影を倒すにあらず。

背後から聲を掛け、

「大分草深くなりますな。」

「段々頂が近いんですよ。やがて此の生が人文

になつて、私の姿が見えませんが、

其を潜つて出ます處が、もう花の原でございます。」

と撫肩の優しい上へ、笠の紐弛く、紅のやうな唇

をつけて、横顔で振向いたが、清しい目許に笑を浮

べて、

「奈何して貴方は那樣にまあ唐天竺とやらへでも

お出で遊ばすやうに遠い處とお思ひなさるのでござ

いませう。」

高坂は手なる杖を荒く支いて、土を騒がす事さへ

せず、慎んで後に續き、

「久しい以前です。一體誰でも昔の事は、遠く隔

つたやうに思ふのですから、事柄と一所に路までも

遙に考へるのかも知れませんが。而して先づ皆夢です

よ。

けれども不<sup>の</sup>残<sup>こ</sup>事<sup>じ</sup>實<sup>じつ</sup>で。

私<sup>わたし</sup>が以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>美<sup>び</sup>女<sup>じょ</sup>ケ原<sup>はら</sup>で、薬<sup>やく</sup>草<sup>そう</sup>を採<sup>と</sup>つたのは、もう二  
十<sup>ねん</sup>年<sup>ねん</sup>、十<sup>ねん</sup>年<sup>ねん</sup>が一<sup>むかし</sup>昔<sup>し</sup>、ざつと二<sup>むかし</sup>昔<sup>し</sup>も前<sup>まへ</sup>になるです、九  
歳<sup>のつと</sup>の年<sup>とし</sup>の夏<sup>なつ</sup>。」

「まあ、そんなにお稚<sup>ちひさ</sup>い時<sup>とき</sup>。」

「尤<sup>もつと</sup>も一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひと</sup>ぢやなかつたです。然<sup>さ</sup>る人<sup>ひと</sup>に連<sup>つ</sup>れられ  
て來<sup>き</sup>たですが、始<sup>はじ</sup>め家<sup>いえ</sup>を迷<sup>まよ</sup>つて出<sup>で</sup>た時<sup>とき</sup>は、東<sup>とう</sup>西<sup>さい</sup>も辨<sup>わきま</sup>  
へぬ、取<sup>と</sup>つて九<sup>こゝのつ</sup>歳<sup>さい</sup>の小<sup>こ</sup>兒<sup>ども</sup>ばかり。」

人<sup>ひと</sup>は高<sup>かう</sup>坂<sup>さか</sup>の光<sup>みい</sup>、私<sup>わたし</sup>の名<sup>な</sup>です、光<sup>みい</sup>坊<sup>ぼう</sup>が魔<sup>ま</sup>に捕<sup>と</sup>られ  
たのだと言<sup>い</sup>ひました。よく此<sup>こ</sup>の地<sup>ち</sup>で言<sup>い</sup>ふ、那<sup>あ</sup>の、天<sup>てん</sup>  
狗<sup>く</sup>に攫<sup>さら</sup>はれた其<sup>それ</sup>です。又<sup>また</sup>實<sup>じつ</sup>際<sup>さい</sup>然<sup>さ</sup>うかも知<sup>し</sup>れんが、幼<sup>をさな</sup>  
心<sup>こゝろ</sup>で、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>ぢや一<sup>いっ</sup>端<sup>ぱん</sup>親<sup>しん</sup>を思<sup>おも</sup>ひ、R P > < / R U B  
Y > つたつもりで。

未<sup>ま</sup>だ兩<sup>ふた</sup>親<sup>おや</sup>ともあつたんです。母<sup>は</sup>親<sup>おや</sup>が大<sup>たい</sup>病<sup>びやう</sup>で、暑<sup>あつ</sup>さ  
の取<sup>と</sup>附<sup>つき</sup>には最<sup>も</sup>う醫<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>が見<sup>み</sup>放<sup>はな</sup>したので、何<sup>ど</sup>うかして其<sup>それ</sup>  
を復<sup>なほ</sup>したい一<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>で、薬<sup>くすり</sup>を採<sup>さが</sup>しに來<sup>きた</sup>たんですな。」

高<sup>かう</sup>坂<sup>さか</sup>は少<sup>し</sup>時<sup>じ</sup>黙<sup>だま</sup>つた。

「恚う言ふと、何か、然も孝行の吹聴するやうで人聞が悪いですが、姉さん、貴女ばかりだから話をする。」

今でこそ、立派な醫者もあり、病院も出来たけれど、奈何して城下が二里四方に開けて居たつて、北國の山の中、醫者らしい醫者も無い。まあ、其頃、土地第一といふ先生まで匙を投げて了ひました。打明けて、父が私たちに聞かせるわけのものぢやない。母様は病氣が悪いから、大人しく為るよ、くらゐにしてあつたんですが、何となく、人の出入、家の者の起居舉動、大病といふのは知れる。

それに其の名醫と云ふのが、五十恰好で、天窓の兀げた癖に髪は黒い、色の白い、ぞろりとした優形な親仁で、脈を取るにも、蛇の目の傘を差すにも、小指を反して、三本の指で、横笛を吹くか、女郎が煙管を持つやうな手付をする、好かない奴。

私がちよこ、近處だから駈出しては、薬取に行くのでしたが、又薬局といふのが、其の先生の甥とか云ふ、ぺろりと長い顔の、額から紅が流れたかと思ふ鼻の尖の赤い男、薬 箆笥の小斗抽斗を抜いて

は、机の上に紙を並べて、調合をしますが、先づ其の匙加減が如何にも怪しい。

相應に流行つて、薬取も多いから、手間取るのが焦つたさに、始終行くので見覚えて、私が其の抽斗を抜いて五つも六つも薬局の机に並べて遣る、終には、先方の手を待たないで、自分で調合をして持つて歸りました。私の為る方が、却つて目方が揃ふくらゐ、大病だつて何だつて、そんな覺束ない薬で快くならうとは思く / R P > < / R U B Y > へんぢやありませんか。

其の頃父は小立野と言ふ處の、驗のある薬師を信心で、毎日參詣爲るので、私も一寸々連れられて行つたです。

後は自分ばかり、乳母に手を曳かれてお詣を爲ましたツケ。別に拝みやうも知らないのです、唯、母親の病氣の快くなるやうと、手を合せる、それも遊び半分。

六月の十五日は、私の誕生日で、其の日、月代

を剃つて、湯に入つてから、紋着の袖の長いのを被せて貰ひました。

私がと言つては可笑いでせう。裾模様の五ツ紋、熨斗目の派手な、此頃聞きや加賀染とか云ふ、菊だの、萩だの、櫻だの、花束が紋に成つて居る、時節に構はず、種々の花を染交せてあります。尤も今時そんな紋着を着る者はない、他國には勿論ないですね。

一體此の醫王山に、四季の花が一時に開く、其の景勝を誇る爲に、加賀ばかりで染めるのださうですな。

まあ、其の紋着を着たんですね、博多に緋の一本獨鈷の小兒帯なぞで。

坊やは綺麗に成りました。母も後毛を搔上げて、而して手水を使つて、乳母が背後から羽織らせた紋着に手を通して、胸へ水色の下じめを巻いたんだが、自分で、帯を取つてメようとすると、それなり力が抜けて、膝を支いたので、乳母が慌て、確乎抱くと、直に天鵝絨の括枕に鳩尾を壓へて、其の上へ胸を伏せたですよ。

産んで下すつた禮を言ふのに、唯御機嫌好うとさへ言へば可いと、父から言ひつかつて、枕頭に手を支いて、其處へ。顔を上げた私と、枕に凭れながら、熟と眺めた母と、顔が合ふと、坊や、最う復るよと言つて、涙をはら／＼、差俯向いて弱々と成つたでせう。

父が肩を抱いて、徐と横に寝かした。乳母が、搔巻を被せ懸けると、襟に手をかけて、向うを向いて了ひました。

臺所から、中の室から、玄關あたりは、ばた／＼人の行交ふ音。尤も帯をしめようとして、濃いお納戸の紋着に下じめの装で倒れた時、乳母が大聲で人を呼んだです。

やがて醫者が袴の裾を、ずる／＼とやつて駈け込んだ。私には戸外へ出て遊んで来いと、乳母が言つたもんだから、庭から出たです。今も忘れない。何とも言ひやうのない、悲しい心細い思ひが爲ましたな。

花賣は聲細く、

「御道理でございますねえ。而して母様は其後快くお成りなさいましたの。」

「お聞きなさい、それからです。」

小兒は切て佛の袖に縫らうと思つたでせう。小立野と言ふは場末です。先づ小さな山くらゐはある高臺、草の茂つた空地澤山な、人通りの無い處を、其の薬師堂へ参つたですが。

朝の内に月代、沐浴なんか爲て、家を出たのは正午過だつたけれども、何時頃薬師堂へ参詣して、何處を歩いたのか、奈何して寝たのか。

翌朝は其の小立野から、八坂と言ひます、八段に黒い瀧の落ちるやうな、眞暗な坂を降りて、川端へ出て居た。川は、鈴見といふ村の入口で、流も急だし、瀬の色も凄いです。

橋は、雨や雪に白つちやけて、長いのが處々、鱗の落ちた形に中弛みがして、のら／＼と架つて居る其の橋の上に茫然と。

後に考へてこそ、翌朝なんですが、其の節は、夜を何處で明かしたか分らないほどですから、小兒は晩方だと思ひました。此の醫王山の頂に、眞白な月が出て居たから。

然し残月であつたんです。何爲かと云ふに其の日の正午頃、づゝと上流の怪しげな渡を、綱に掴まつて、宙へ釣されるやうにして渡つた時は、顔が赫とする晃々と烈い日當。

恚う言ふと、何だか明方だか晩方だか、宛然夢のやうに聞えるけれども、渡を渡つたには全く渡つたですよ。

山路は一日がりと覺悟をして、今度來るには麓で一泊したですが、昨日丁度前の時と同一時刻、正午頃です。岩も水も眞白な日當の中を、あの渡を渡つて見ると、二十年の昔に變らず、船着の岩も、船出の松も、確に覺えがありました。

然し九歳で越した折は、爺さんの船頭が居て船を扱ひましたつけ。昨日は唯綱を手繰つて、一人で越したです。乗合も何も無い。

御存じの烈しい流で、棹の立つ瀬は無いですから、  
綱は二條、染物をしんし張に爲たやうに隙間なく手  
懸が出来て居る。船は小さし、胴の間へ突立つて、  
釣下つて、互違に手を掛けて、川幅三十間ばかり  
を小半時、幾度もはつと思く / R P > < / R U B Y  
> つちや、危さに自然に目を塞ぐ。其の目を開ける  
時、もし、あの丈の伸びた菜種の花が断崖の巖越に、  
ばら／＼見えんでは、到底此の世の事とは思はれな  
かつたらうと考へます。

十里四方には人らしい者も無いやうに、船を纜つ  
た大木の松の幹に立札して、渡船錢三文とある。

話は前後に成りました。

其處で小兒は、鈴見の橋にイんで、前方を見ると、  
正面の中空へ、佛の掌を開いたやうに、五本の指  
の竝んだ形、轟々立つたのが戸室の石山。靄か、霧  
か、後を包んで、年に二三度好く晴れた時で無いと、  
蒼く顯れて見えないのが、即ち此の醫王山です。

其處に此の山が有るくらゐは、豫て聞いて、小兒

心にも方角を知つて居た。而して迷子に成つたか、魔に捉られたか、知れもしないのに、稚な者は、暢氣ぢやありませんか。

それが既に氣が變に成つて居たからであらうも知れんが、お腹が空かぬだけに一向苦に成らず。壊れた竹の欄干に掴つて、月の懸つた雪の中の、彼が醫王山と見て居る内に、板橋をこと／＼踏んで、

向の山に、猿が三疋住みやる。中の小猿が、能う物饒舌る。何と小兒等花折りに行くまいか。今日の寒いに何の花折りに。牡丹、芍薬、菊の花折りに。一本折つては笠に挿し、二本折つては、蓑に挿し、三枝四枝に日が暮れて…と不圖唄ひながら。

何となく心に浮んだは、あゝ、向うの山から、月影に見ても色の紅な花を採つて来て、それを母親の髪に挿したら、屹度病氣が復るに違ひないと言ふ事です。又母は、其の花を簪にしても似合ふくらゐ若かつたですな。

高坂は舊來た方を顧みだが、草の外には何も無い、

一步前へ花賣の女、如何にも身に染みて聞くやうに、俯向いて行くのであつた。

「そして確に、其が薬師のお告であると思つたで  
すね。」

「さあ思ひ立つては矢も楯も堪らない、渡り懸けた  
橋を取つて返して、堤防傳ひに川上へ。」

後で又渡を越えなければならぬ路ですがね、橋  
から見ると山の位置は月の入る方へ傾いて、却つて  
此處から言ふと、對岸の行留りの雪の上らしく見え  
ますから、小兒心に取つて返したのが丁ど幸と、  
橋から渡場まで行く間の、あの、岩淵の岩は、人を  
隔てる醫王山の一の砦と言つても可い。戸室の石  
山の麓が直に流に迫る處で、累り合つた岩石だから、  
路は其處で切れるですものね。

岩淵を此方に見て、大方跣足で居たでせう、すた  
／＼五里も十里も辿つた意で、正午頃に着いたのが、  
鳴子の渡。」

## 第四章

「馬士にも、荷擔夫にも、畑打つ人にも、三人二人くらゐ宛、村一つ越しては川沿の堤防へ出る毎に逢つたですが、皆唯立停つて、じろ／＼見送つたばかり、言葉を懸ける者は無かつたです。是は熨斗目の紋着振袖と云ふ、田舎に珍しい異形な扮装だつたから、不思議な若殿、迂潤に物も言へないと考へたか、眞晝間、狐が化けた？ とでも思／＼R P > < / R U B Y > つたでせう。其とも本人逆上返つて、何を言はれても耳に入らなかつたのかも解らんですよ。

弗と其の渡場の手前で、背後から始めて呼び留めた親仁があります。兄や、兄やと太い調子。

私は仰向いて見ました。

づんぐり脊の高い、銅色の巖乗 造な、年配四十五六、古い単衣の裾をぐいと端折つて、赤脛に脚絆、素足に草鞋、くわつと眩いほど日が照るのに、笠は被らず、其の菅笠の紐に、桐油合羽を疊んで、小さく縦に長く折つたのを結へて、振分けに為て肩

に投げて、兩提の煙草入、大きいのをぶら提げて、  
奈何云ふ氣か、澁團扇で、はた／＼と胸毛を煽ぎな  
がら、てくり／＼寄つて来て、何處へ行くだ。

御山へ花を取りに、と返事すると、ふん其ならば  
可し、小父が同土に行つて遣るべい。但、此の前の  
渡を一つ越さねばならぬで、渡守が咎立をすると面  
倒ぢや、さあ、負され、と言つて背中を向けたから、  
合羽を跨ぐ、足を向うへ取つて、猿の兒背負、高く  
肩車に乗せたですな。

其の中も心の急く、山はと見ると、戸室が低く成  
つて、此の醫王山が鮮明な深翠、肩の上から下に瞰  
下されるやうな氣が爲ました。位置は變つて、川の  
反対の方に見えて来た、成程渡を渡らねば成ります  
まい。

足を壓へた片手を後へ、腰の兩提の中をちやら／  
＼為せて、爺様頼んます、鎮守の祭禮を見に、頼ま  
れた和郎ぢや、と言ふと、船を寄せた老人の腰は、  
親仁の兩提よりもふら／＼して干柿のやうに干から

びたちひ小さな爺ぢい。

やがて綱つなに掴つかまつて、縋すがると疾はやい事こと！

雀すずめが鳴子なるこを渡わたるやう、猿さるが梢こすえを傳つたふやう、さら／

、さつと。」

高坂かうさかは思おもはず足踏あしぶみをした、草くさの茂しげりがむら／＼と揺ゆら

いで、花片はなびらが又またもや散ちり來くる　　――　二片ひら三片ひら、虚おほ

空そらから。　　――

「左右さいうへ傾かたむく舷ふなばた　へ、流ながれ蒼あせく搦からみ着ついて、眞白まつしろ

に颯さつと翻ひるがへると、乗のつた親仁おやぢも馴なれたもので、小兒こども

を擔かついだまゝ仁王立にわうだち。

まじいを／＼RTVVVVVV  
眞蒼まじい < / R P > < / R U B Y > な水底みなそこへ、黒くろく透す

いて、底そこは知しれず、目め前まへへ押被おつかぶさつた大巖おほいはの肚はらへ、

ぴたりと船ふねが吸寄すひよせられた。岸きしは可おそろし恐こく水みづは深ふかい。

巖角いはかどに刻きざを入れて、是これを足懸あしがゝりにして、此方こつちの堤ど

防てへ上あがるんですな。昨日きのふ私わたしが越こした時ときは、先まづ第だい一

番ばんの危難きなんに逢あふかと、膏汗あぶらあせを流ながして漸々やう／＼縋すがり着ついて

上あがつたですが、何なに、其その時ときの親仁おやぢは　　平氣へいきなもの

です。」

高坂は莞爾して、「爪尖を懸けると更に苦なく、  
負さつた私の方が却つて目を塞いだばかりでした。  
扱、些と歩行かつせえと、岸で下してくれました。  
其からは少しづつ次第に流に遠ざかつて、田の畦三  
つばかり横に切れると、今度は赤土の一本道、兩側  
にちらほら松の植わつて居る處へ出ました。

六月の中ばとは云つても、此邊には珍しい酷暑  
い日だと思ひましたが、川を渡り切つた時分から、  
戸室山が雲を吐いて、處々田の水へ、眞黒な雲が往  
つたり、來たり。

並木の松と松との間が、どんよりして、梢が鳴る、  
と思ふとはや大粒な雨がばら／＼、立樹を五本と越  
えない中に、車軸を流す烈しい驟雨。ちよつ待て／  
＼、と獨言して、親仁が私の手を取つて、そら、臺  
なしに成るから脱げと言ふまゝにすると、帯を解い  
て、紋着を剥いで、淺黄の襟の細く掛つた襦袢も殘  
らず。

小兒は絲も懸けぬ全裸體。

雨は浴るやうだし、恐さは恐し、ぶる／＼顫へると、親仁が、強いぞ強いぞ、と言つて、私の衣類を一丸げにして、懷中を膨らますと、紐を解いて、笠を一文字に冠つたです。

それから幹に立たせて置いて、やがて例の桐油合羽を開いて、私の天窓からすつぱりと目ばかり出るほど、宛然澁紙の小兒の小包。

いや！ 出来た、これなら海を潜つても濡れることでは無い、さあ、眞直に前途へ駈け出せ、曳、と言つて、板で打たれたと思く / R P > < / R U B Y > つた、私の臀をぴたりと一つ。

濡れた團扇は骨ばかりに裂けました。

怪飛んだやうに成つて、蹠踉けて土砂降の中を飛出すと、くるりと合羽に包まれて、見えるは脚ばかりぢやありませんか。

亦蛙が化けたわ、化けたわと、親仁が呵々と笑つたですが、もう耳も聞えず眞暗三寶。何か黒山のやうな物に打付かつて、斛斗を打つて仰様に轉ぶと、瀧のやうな雨の中に、ひゝんと馬の嘶く聲。

漸々人の手に扶け起されると、合羽を解いて呉れたのは、五十ばかりの肥った婆さん。馬士が一人腕組をして突立つて居た。門の柳の翠から、黒駒の背へ雫が流れて、はや雲切がして、其の柳の梢などは薄雲の底に蒼空が動いて居ます。

妙なものが降り込んだ。これが豆腐なら資本入らずぢや、其とも此まゝ熨斗を付けて、鎮守様へ納めさつしやるかと、馬士は掌で吸殻をころ／＼遣る。

主さ、何うした、と婆さんが聞くんですが、四邊をきよと／＼みまはすばかり。

何處から出た乞食だよ、と又酷いことを言ひます。尤も裸體が澁紙に包まれて居たんぢや、氏素性有らうとは思はぬ筈。

衣物を脱がせた親仁はと、唯悔しく、来た方を眺めると、脊が小さいから馬の腹を透かして雨上りの松並木、青田の緑の用水に、白鷺の遠く飛ぶまで、睨がづゝと見渡されて、西日がほんのり紅いのに、急な大雨で往來もばつたり、其の親仁らしい姿も見

えぬ。

餘あまの事ことにしく／＼泣なき出だすと、こりや餒ひもじうて口くちも利きけぬな、商賣あきなひ品もので錢ぜにを啣かませるやうぢやけれど、一一つ振舞ふるまうて遣やるかいと、汚きたない土間どまに縁臺えんだいに竝ならべた、狭せまツくるしい暗くらい隅すみの、苔こけの生はえた桶おけの中なかから、豆腐とうふを半挺はんちやう、皺しわ手に白しろく積つんで、そりや／＼と、頬ほ邊べたの處ところへ突つき出だしてくれましたですが、奈何どうして是これが食たべられますか。

其癖腹そのくせはらは干ほされたやうに空すいて居ありましたが、胸むね一杯いっぱいに成なつて、頭かぶりを掉ふると、はて食好しょくこのみをする犬いぬの、と呶うはいて、ぶくりと又水またみづへ落おして、これや、慈悲じひを享うけぬ餓鬼がきめ、出でて失うせと、私わたしの胸むねへ突つ懸かけた皺しわだらけの手の黒くろさ、顔かほも漆うるしで固かためたやう。

黒婆くろばどの、情無なさけない事ことせまいと、名なも成程なるほど黒婆くろばといふのか、馬士まごが中なかへ割わつて入はいると、貨かしを返かえせ、此この人にん足そくめと怒鳴どなりつたです。すると其その豆腐とうふの桶おけの有ある後つが、蜘蛛くもの巣すだらけの藤棚ふじだなで、是これを地境ちさかいにして壁かべも垣かきも無い隣家となりの小家こいえの、爐ろの縁ふちに、膝ひざに手てを置おいて蹲ひづつて居あた、十じゅうばかりも年上としうえらしいお媪おばあさん。

見兼ねたか、縁側から摺つて下り、ごつ／＼轉がつた石塊を跨いで、藤棚を潜つて顔を出したが、柔和な面相、色が白い。

小兒衆々々、私が許へござれ、と言ふ。疾く白媼が家へ行かつしやい、借が無くば、此處へ馬を繋ぐではないと、馬士は腰の胴亂に煙管をぐつと突込んだ。其處で裸體で手を曳かれて、土間の隅を抜けて、隣家へ連込まれる時分には、鳶が鳴いて、遠くで大勢の人聲、祭禮の太鼓が聞えました。」

高坂は打案じ、

「渡場から此方は、一生私に忘れない處なんだね、で今度来る時も、前の世の旅を二度する氣で、松一本、橋一ツも心をつけて見たんだけど、それらしい家も無く、柳の樹も分らない。それに今ぢや、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くやうになつたから、人通もなし。大方、其の馬士も、老人も、最う此の世の者ぢやあるまいと思ふ、私は何だか其の人達の、那のまゝ、影を埋めた、丁ど其上を、姉さん。」

花賣は後姿のまゝ引留められたやうになつて停

つた。

「貴女と二人で歩行いて居るやうに思ふですが

ね。」

「それから奈何遊ばした、まあお話しなさいま

し。」

と靜に前へ。高坂も徐ろに、

「娘が来て世話をするまで、私には衣服を着せる才覺も無い。暑い時節ぢやで、何とも無かるが、然ぞ餒からうで、是でも食はつしやれつて。」

圍爐裡の灰の中に、ぶす／＼と燻つて居たのを、抜き出してくれたのは、串に刺した茄子の焼いたんで。

ぶく／＼樺色に膨れて、湯氣が立つて居たです。

生豆腐の手掴に比べては、勿體ない御料理と思く / R P > < / R U B Y > つた。其にくれるのが優し

げなお婆さん。

地が性に合ふで好う出来るが、未だ此の村でも初物ぢやと云ふ、其を、空腹へ三つばかり頬張りました。熱い汁が下腹へ、たら／＼と染みた處から、一睡して目が覺めると、きや／＼痛み出して、臆て吐

くやら、瀉すやら、尾籠なお話だが七顛八倒。能も生きて居られた事と、今でも思</R P></R U B Y>ふです。然し、もう其の時は、命の親の、優しい手に抱かれて居ました。世にも綺麗な娘で。

人心地も無く苦しんだ目が、幽に開いた時。烈めて見た姿は、艶かな黒髪を、男のやうな鬘に結んで、緋縮緬の襦袢を片肌脱いで居ました。日が経つて醫王山へ花を採りに、私の手を曳いて、樓に朱の欄干のある、温泉宿を忍んで裏口から朝月夜に、田圃道へ出た時は、中形の浴衣に襦子の帯をしめて、鎌を一挺、手拭にくるんで居たです。其間に、白媼の内を。私を膝に抱いて出た時は、鬘を唐輪のやうに結つて、胸には玉を飾つて、丁ど天女のやうな扮装をして、車を、牛に曳かせたのに乗つて、わい／＼と云ふ群集の中を、通つたですが、村の者が交る／＼高く傘を掛かけて練つたです。

村端で、寺に休むと、此處で支度を替へて、多勢が口々に、御苦勞、御苦勞と云ふのを聞棄てに、娘は、一人の若い者に負させた私に一寸頬摺をして、

それから、石高路の坂を越して、賑かに二階屋の揃  
つた中の、一番屋の棟の高い家へ入つたですが、私  
は唯幽に坤吟いて居たばかり。尤も白姥の家に三晩  
寝ました。其の内も、娘は外へ出ては歸つて来て、  
膝枕を為せて、始終集つて来る馬蠅を、拂つてくれ  
たのを、現に苦みながら覺えて居ます。車に乗つた  
天女に抱かれて、多人數に圍まれて通つた時、庚申  
堂の傍に榛の木で、半ば姿を秘して、群集を放れ  
てすつくと立つた、脊の高い親仁があつて、熟と私  
どもを見て居たのが、確に衣服を脱がせた奴と見た  
けれども、小兒は未だ口が利けないほど容體が悪か  
つたんですな。

私はたゞ其の氣高い艶麗な人を、今でも神か佛か  
と、思ふけれど、後で考へると、先づ慙うだらうと、  
思はれるのは、姥の娘で、清水谷の温泉へ、奉公に  
出て居たのを、祭に就いて、村の若い者が借りて來  
て八ヶ村九ヶ村を是見よと喚いて歩いたものでせ  
う。娘は不圖すると、湯女などであつたかも知れな  
いです。」

## 第五章

「それから其の人の部屋とも思はれる、綺麗な小座敷へ寝かされて、目の覚める時、物の欲しい時、咽の乾く時、涙の出る時、何時も其の娘が顔を見せない事は無かつたです。

自分でも、もう、病氣が復つたと思< / R P > / R U B Y > つた晩、手を曳いて、たら／＼光る長い廊下を、湯殿へ連れて行つて、一所に透通るやうな温泉を浴びて、岩を平にした湯槽の傍で、すつかり體を流してから、櫛を抜いて、私の髪を柔く梳いてくれる二櫛三櫛、懸て其の櫛を湯殿の岩の上から、廊下の灯に透して、氣高い横顔で、熟と見て、あゝ好い事、美しい髪も抜けず、汚い蟲も付かなかつたと言ひました。私も氣がさして一所に櫛を覗めたが、自分の膚も、人の體も、其の時くらゐ清く、白く美しいのは見た事がない。

私は新しい着物を着せられ、娘は桃色の扱帯のまゝ、又手を曳いて、今度は裏梯子から二階へ上つ

た。其の段を昇り切ると、取着一室、新しく建増したと見えて、襖がない、白い床へ、月影が澆と射した。兩側の部屋は皆陰々と灯を置いて、鎮り返つた夜半の事です。

好い月だこと、まあ、と其のまゝ手を取つて床板を踏んで出ると、小窓が一ひと》つ。其にも障子が無いので、二人で覗くと、前の甕は露が流れて、銀が溶けて走るやう。

月は山の端を放れて、半腹は暗いが、眞珠を頂いた峰は水が澄んだか明るいので、山は、と聞くと、醫王山だと言ひました。

途端にくわいと狐が鳴いたから、娘は緊乎と私を抱く。其胸に額を當てゝ、私は我知らず、わつと泣いた。

怖くは無いよ、否怖いのは無いと言つて、母親の病氣の次第。

恚いふ澄み渡つた月に眺めて、其の色いろの赤あかく輝かく花はなを採とつて歸かへりたいと、始はじめて此この人ひとならばと思おもへる／＼  
RP > < / R U B Y > つて、打明うちあけて言いふと、暫しばく

黙つて瞳を据ゑて、私の顔を見て居たが、月夜に色の眞紅な花――屹度探しませうと言つて、――可し、可し、女の念で、と後を言いひ足したです  
ね。

翌晩、夜更けて私を起しますから、素より此方も目を開けて待つた處、直ぐに支度をして、爾時、帯をきりりとメめた、引掛に、先刻言ひましたね、刃を手拭でくる／＼と巻いた鎌一挺。

それから昨夜の、其の月の射す窓から密と出て、瓦根へ下りると、夕顔の葉の搦んだ中へ、梯子が隠して掛けてあつた。傳つて庭へ出て、裏木戸の鍵をがらりと開けて出ると、有明月の山の裾。

醫王山は手に取るやうに見えたけれど、是は秘密の山の搦手で、其處から上る道は無いですから、戸室口へ廻つて、攀ぢ上つたものと見えます。さあ、此處からが目差す御山と云ふまでに、辻堂で二晩寝ました。

後は何う来たか、恐い姿、凄い者の路を遮つて顯るゝ度に、娘は私を背後に庇うて、其の鎌を差翳し、轟と立つと、鎧うた姫神のやうに頼母しいにつけ、雲の消えるやうに路が開けてずん／＼と。」

時に高坂は布を断つが如き音を聞いて、唯見ると、前へ立つた、女の姿は、其の肩あたりまで草隠れに成つたが、背後ざまに手を動かすに連れて、鋭き鎌、磨ける玉の如く、弓形に出没して、歩行き／＼掬切に、刃形が上下に動くと共に、丈なす茅萱半ばかり、凡そ一抱づゝ、さつくと切れて、靡き伏して、隠れた土が歩一歩、飛々に顯れて、五尺三尺一尺づゝ、前途に渠を導くのである。

高坂は、悚然として思はず手を挙げ、嘗て婦が我に爲したる如く伏拜んで肅然とした。

其の不意に立停つたのを、行悩んだと思く/RP  
></RUBY>つたらしい、花賣は軽く見返り、  
「貴方、最う些とでございますよ。」  
「何うぞ。」と云つた高坂は今更ながら言葉さへ

謹んで、

「美女ヶ原に今も其花がありませんか。」

「何うも身に染むお話。何うぞ早く後をお聞せな

さいまし、而して其の時、其の花はござんしたか。」

「花は全く有つたんですが、何時も然うやつて美

女ヶ原へお出の事だから、御存じはないでせうか。」

「参りましたら、其の姉さんがなすつたやうに、

一所にお探し申ませう。」

「それでも私は月の出るのを待ちますつもり。其の花籠にさへ一杯に成つたら、貴女は日一杯に歸る

でせう。」

「否、いつも一人で往復 爲ます時は、馴れて何

とも思ひませんでございましたけれども、懣じお連

が出来て見ますと、もう寂しくつて一人では歸られ

ませんから、御一所にお歸りまでお待ち申ませう。

其の代どうぞ花籠の方はお手傳ひ下さいましな。」

「そりや、云ふまでもありません。」

「而してまあ、甚麼處にございましたえ。」

「其こそ夢のやうだと、云ふのだらうと思ひます。

路すがら、然うやつて、影のやうな障礙に出遇つて、

今にも娘が血に染まつて、私は取つて殺されうと、

幾度思つたか解りませんが、黄昏と思ふ時、其の美女ケ原といふのでせう。凡八町四方ばかりの間、扇の地紙のやうな形に、空にも下にも充滿の花です。

其まゝ二人で跪いて、娘が爲るやうに手を合せて居りました。月が出ると、餘り容易い。つい目の前の芍薬の花の中に花片の形が變つて、眞紅なのが唯一輪。

採つて前髪に押頂いた時、私の頭を撫でながら、餘の嬉しさ、娘ははゝらゝと落涙して、もう死ぬまで、此の心を忘れてはなりませんと、私の頭に挿させようと爲ましたけれども、髪は結んで無いのですから、其處で娘が、自分の黒髪に挿しました。人の簪の花に成つても、月影に色は眞紅だつたです。

母様の御大病、一刻も早く、直ぐに、美女ケ原を後に爲ました。

引返す時は、苦も無く、すら／＼と下りられて、早や暁の鶏の聲。

嬉しや人里も近いと思ふ、月が落ちて明方の闇を、向うから、洵々と四五人連、松明を擧げて近寄つた。

人可懐くいそ／＼寄ると、いづれも屈竟な荒漢で。

中に一人、見た事の有る顔と、思ひ出した。黒婆が家に馬を繋いだ馬士で、其の馬士、二人の姿を見ると、遁がすなと突然、私を小脇に引抱へる、残つた奴が三人四 R u b y > 人で、えゝ！と云ふ娘を手取足取。

何處を奈何、何の方角を何のくらゐ駈けたか宛然夢中です。

臆て氣が付くと、娘、と二人で、大な座敷の片隅に、馬士交り七八人に取巻かれて坐つて居ました。

何百年か解らない古襖の正面、板の間のやうな床を背負つて、大胡坐で控へたのは、何と、鳴子の渡を仁王立で越した抜群な其の親仁で。

臆惚した小兒の顔を見ると、過日の四季の花染の袷を、ひたりと目の前へ投げて寄越して、大口を開いて笑つた。

や、二人とも氣に入つた、坊主は兒に成れ、女は  
其の母に成れ、而して何時までも娑婆へ歸るな、と  
言つたんです。

娘は亂髪になつて、其の花を持つたまゝ、膝に手  
を置いて、首垂れて黙つて居た。其の返事を聞く手  
段で有つたと見えて、私は二晩、土間の上へ、可恐  
い高い屋根裏に釣つた、駕籠の中へ入れて釣された  
んです。紙に乗せて、握飯を突込んでくれたけれど、  
其が食べられるもんですか。

垂から透して、土間へ焚火を爲たのに雪のやうな  
顔を照らされて、娘が縛られて居たのを見ましたが、  
其なり目が眩んで了つたです。どんと駕籠が土間に  
下りた時、中から五六疋鼠がちよろ／＼と駈出した  
が、代に娘が入つて來ました。

薫の高い薬を嚙んで口移しに含められて、膝に抱  
かれたから、一生懸命に緊乎縋り着くと、背中へ  
廻つた手が空を撫でるやうで、娘は空蟬の殻かと思  
えて、唯た二晩がほどに、絲のやうに瘠せたです。

最<sup>も</sup>うお目<sup>め</sup>に懸<sup>か</sup>られぬ、あの花<sup>はな</sup>染<sup>ぞめ</sup>のお小<sup>こ</sup>袖<sup>そで</sup>は記<sup>か</sup>念<sup>たみ</sup>に私<sup>わたし</sup>に下<sup>くだ</sup>さいまし。然<sup>しか</sup>し義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>が有<sup>あ</sup>りますから、必<sup>かなら</sup>ず恚<sup>こん</sup>麼<sup>なごころ</sup>處<sup>ところ</sup>に隠<sup>かく</sup>れが有<sup>あ</sup>ると、町<sup>まち</sup>へ歸<sup>かへ</sup>つても言<sup>い</sup>ふのではありませぬ、と蒼<sup>あを</sup>白<sup>しろ</sup>い顔<sup>かほ</sup>して言<sup>い</sup>ひ聞<sup>き</sup>かす中<sup>うち</sup>に、駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>が昇<sup>あ</sup>がれて、うと／＼と十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>町<sup>ちやう</sup>。

奥<sup>おく</sup>様<sup>さま</sup>、此<sup>こゝ</sup>處<sup>ゝ</sup>まで、と聲<sup>こゑ</sup>がして、駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>が下<sup>お</sup>りると、一人<sup>ひとり</sup>手<sup>て</sup>を取<sup>と</sup>つて私<sup>わたし</sup>を外<sup>そと</sup>へ出<sup>だ</sup>しました。

左<sup>ひだり</sup>右<sup>みぎ</sup>に土<sup>ど</sup>下<sup>げ</sup>座<sup>ざ</sup>して、手<sup>て</sup>を支<sup>つ</sup>いて居<sup>ゐ</sup>た中<sup>なか</sup>に馬<sup>ま</sup>士<sup>ご</sup>も居<sup>ゐ</sup>た。一人<sup>ひとり</sup>が背<sup>せ</sup>中<sup>ちゆう</sup>に私<sup>わたし</sup>を負<sup>お</sup>ふと、娘<sup>むすめ</sup>は駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>から出<sup>で</sup>て見<sup>み</sup>送<sup>く</sup>つたが、顔<sup>かほ</sup>に袖<sup>そで</sup>を當<sup>あ</sup>てゝ、長<sup>なが</sup>柄<sup>がえ</sup>にはツと泣<sup>なき</sup>伏<sup>ふ</sup>しました。其<sup>それ</sup>ツ限<sup>きり</sup>。」

高<sup>かう</sup>坂<sup>さか</sup>は聲<sup>こゑ</sup>も曇<sup>くも</sup>つて、

「私<sup>わたし</sup>を負<sup>お</sup>つた男<sup>をとこ</sup>は、村<sup>むら</sup>を離<sup>はな</sup>れ、川<sup>かは</sup>を越<sup>こ</sup>して、遥<sup>はるか</sup>に鈴<sup>すず</sup>見<sup>み</sup>の橋<sup>はし</sup>の袂<sup>たもと</sup>に差<sup>さ</sup>置<sup>お</sup>いて歸<sup>かへ</sup>りましたが、此<sup>こ</sup>の男<sup>をとこ</sup>は唾<sup>あつし</sup>と見<sup>み</sup>えて、長<sup>なが</sup>い途<sup>みち</sup>に一<sup>ひと</sup>言<sup>こと</sup>も物<sup>もの</sup>を言<sup>い</sup>や爲<sup>し</sup>ませぬ。」

私<sup>わたし</sup>は死<sup>し</sup>んだ者<sup>もの</sup>が蘇<sup>よ</sup>生<sup>みが</sup>つたやうに成<sup>な</sup>つて、家<sup>うち</sup>へ歸<sup>かへ</sup>りましたが、丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>全<sup>まる</sup>三<sup>さん</sup>月<sup>がつ</sup>経<sup>けい</sup>つたです。

花を枕頭に差置くと、其の時も絶え入つて居た母は、呼吸を返して、それから日増に快くなつて、五年経つてから亡くなりました。魔隠に逢つた小児が歸つた喜びの為に、一旦本復を爲たのだと云ふ人も有りますが、私は、其の娘の取つてくれた薬草の功德だと思ふです。

それに就けても、恩人は、と思ふ。娘は山賊に捕はれた事を、小兒心にも知つて居たけれども、堅く言付けられて歸つたから、其頃三ヶ國横行の大賊が、つい私どもの隣の家へ入つた時も、何も言はないで黙つて居ました。

けれども、それから足が附いて、二俣の奥、戸室の麓、岩で城を築いた山寺に、兇賊籠ると知れて、未だ邏卒といつた時分、捕方が多人數、隱家を取巻いた時、表門の眞只中へ、其の親仁だと言ひます、六尺一つの丸裸體、脚絆を堅く、草鞋を引ぬめ、背かへ十文字に引背負つた、四季の花染の熨斗目の紋着、振袖が颯と山嵐に纏れる中に、女の黒髪がはら／＼と零れて居た。

手に一條大身の槍を提げて、背負つた女房が死骸でなくば、死人の山を築く筈、無理に手活の花に爲た、申譯の葬に、醫王山の美女ヶ原、花の中に埋めて歸る。汝等見送つても命が無いぞと、近寄つたのを五六人、蹴散らして、ばつと退く中を、衝と抜けると、岩を飛び、岩を飛び、岩を飛んで、廳て槍を杖いて岩角に隠れて、それなりけりと云ふので、扱はと、それから私は私其の娘に出逢ふ門出だつた誕生日に、鈴見の橋の上まで来ては、此方を拝んで歸りノゝしたですが、母が亡くなりました翌年から、東京へ修行に參つて、國へ歸つたのは漸と昨年。始終望んで居ました此の山へ、後を尋ねて上る事が、物に取紛れて居る中に、申譯も無い飛んだ身勝手な。又其の藥を頂かねばならないやうに成つたです。以前は其が為に類少い女を一人、犠に爲たくらゐですから、今度は自分が甚麼辛苦も決して厭はない。いかにも爲て其の花が欲しいですが。」

言ふ中に胸が迫つて、涙を湛へた爲ばかりで無い。弗と、心付くと消えたやうに女の姿が見えないのは、

草くさが深ふかくなつた所せ為めであつた。

丈たけより高たかい茅ちが萱やを潜くぐつて、肩かたで搔かき分け、頭つむりで避よけ

つゝ、見みえない人ひとに、物もの言いひ懸かける術すべも無ないので、

高かう坂さかは御おき經やうを取とつて押おし戴いたき、

山さん川せん險けん谷こく

幽いう邃すゐ所しよ生やう

卉き木ぼく藥やく艸さう

大だい小せう諸しよ樹じゆ

百ひゃく穀こく苗べう稼が

甘かん庶しよ葡ぶ萄たう

雨う之しよ所じゆん潤ん

無む不ふ豊ぶ足そく

乾かん地ち普ぶ洽がふ

藥やく木ぼく並びやう茂もう

其こ雲うん所しよ出じゆつ

一いち味み之し水すゐ

草くさの影かげが映うつつたが、見みつゝ進すすむ内うちに、ちちら／＼と紅くれな  
葎むぐらの中なかに日ひが射さして、經きやう卷くわんに、蒼あせく月つきかと思おもふ

來り、黄來り、紫去り、白過ぎて、蝶の戯るゝ風  
情して、偈に斑々と印したのは、はや咲交る四季の  
花。

忽然として天開け、身は雲に包まれて、妙なる薫  
袖を蔽ひ、唯見ると堆き雪の如く、眞白き中に紅  
ちらめき、躡むる瞳に緑映じて、颯と分れて、一つ  
一つ、花片となり、葉となつて、美女ヶ原の花は高  
坂の袂に匂ひ、胸に咲いた。

花賣は籠を下して、立休らうて居た。笠を脱いで、  
襟脚長く玉を伸べて、瑩澤なる黒髪を高く結んだの  
に、何時の間にか一輪の小さな花を簪して居た、裊は  
づれ、袂の端、大輪の菊の色白き中に佇んで、高坂  
を待つて、莞爾と笑む、美しく氣高き面ざし、威あ  
る瞳に屹と射られて、今物語つた人とも覺えず、は  
つと思ふと學生は、既に身を忘れ、名を忘れて、唯  
九ツばかりの稚兒に成つた思ひであつた。

「さあ、お話に紛れて遅く來ましたから、もうお  
月様が見えませう。其までにどうぞ手傳つて花籠に

摘んで下さいまし。」

と男を頼るやうに言はれたけれども、高坂は却つて唯々として、恰も神に事ふるが如く、左に菊を折り、右に牡丹を折り、前に桔梗を掴み、後に朝顔を手繰つて、再び、鈴見の橋、鳴子の渡、罫の夕立、黒婆の生豆腐、白姥の焼茄子、牛車の天女、湯宿の月、山路の利鎌、賊の住家、戸室口の別を繰返して語りつゝ、馳で一巡した時、花籠は美しく満たされたのである。

すると籠は、花ながら花の中に埋もれて消えた。月影が射したから、伏拝んで、心を籠めて、透かし透かし見たけれども、二したけれども、見遣つたけれども、ものゝ薫に形あつて仄に幻かと思ゆるばかり、雲も雪も紫も偏に夜の色に紛るゝのみ。

殆ど絶望して倒れようと爲た時、思ひ懸けず見ると、肩を竝べて齊しく手を合せてすらりと立つた、其の黒髪の花唯一 Ruby > 輪、紅なりけり月の光に。

高坂が其の足許に平伏したのは言ふまでもなかつ

た。

其時肩を落して、美女が手を取ると、取られて膝をずらして縋着いて、その帯のあたりに面を上げたのを、月を浴びて臍長けた、優しい顔で熟と見て、少し頬を傾けると、髪が其方へはら／＼となるのを、密と押へる手に、簪を抜いて、戦く醫學生の襟に挟んで、恍惚爲たが、瞳が動き、

「あゝ、お可懐い。思ふお方の御病氣は屹度其で治ります。」

あはれ、高坂が緊乎と留めた手は徒に莖を掴んで、袂は空に、美女ヶ原は咲満ちたまゝ、ゆら／＼と前へ出たやうに覺えて、人の姿は遠く成つた。

立つて追はうと爲ると、岩に牡丹の咲重つて、白き象の大なる頭の如き頂へ、雲に入るやう衝と立つた時、一度其の鮮明な眉が見えたが、月に風無き野となんぬ。

高坂は(三)と坐した。

恚く胸なる紅の一輪を栞に、傍の芍薬の花、

方ほう一尺しやくなる經きやうを据すゑて、合がつしやう掌やうして、藥やくわう王ぼん品ぼんを夜よもす  
がら。

【完】